

31. 高齢者の自己決定を支援する要因に関する研究 介護職員調査に焦点を当てて

- 山下恵利子(社会福祉法人寿光会 今川デイサービスセンター管理者)
田中 幸子(社会福祉法人大阪障害者自立支援協会ケアハウス歓の里施設長)
緑間百合子(介護老人保健施設箕面グリーンビラ 介護支援専門員)
山根キヨコ(社会福祉法人大阪府社会福祉事業団 特別養護老人ホーム美原荘介護職員)
三宅奈津子(社会福祉法人大阪府社会福祉事業団 特別養護老人ホーム光明荘介護職員)
山田 京子(柏原市社会福祉協議会 高齢者いきいき元気センター センター長)
笠原 幸子(四天王寺大学短期大学部 教授)

1. 「自己決定」の定義

誰もが自分自身の目的と価値観に従って、自分が最善と考える価値を選択し、決定、実現することであり、それはまた自分自身のみにとどまらず、他者に対しても、さまざまな段階での個々人の自己決定が表明され、尊重されるための働きかけをも含む包括的なものである

2. 研究目的

高齢者の自己決定は、日常生活における食事や衣服の選択といった小さな自己決定から、どこで生活するかといった大きな自己決定まで多様なレベルで存在する。本研究では、高齢者の様々なサービスステージにおける高齢者の自己決定の現況を明らかにするとともに、高齢者の思いや選択(自己決定)が尊重される支援を実現するために、介護職員に求められる援助の条件を明らかにすることを目的とする。

3. 究計画

(1) 承諾を得た研究メンバーの職場の高齢者及び介護職員を対象に、半構成的面接法を採用し、質的調査を行う。介護職員に対する質的調査は、社会福祉法人大阪府社会福祉事業団特別養護老人ホーム光明荘、介護老人保健施設箕面グリーンビラ等で実施。高齢者に対する質的調査は、社会福祉法人大阪障害者自立支援協会ケアハウスOSAKA歓の里で実施した。

表1 調査対象者(介護職員)のプロフィール

	性別	年齢	現在の勤務施設のサービス形態	介護職勤務年数(年)
A	女性	51	従来型のケア	21
B	女性	36	従来型のケア	6

C	女性	29	ユニットケア	8
D	男性	38	従来型のケア	10
E	女性	25	従来型のケア	3
F	女性	54	従来型のケア	31
G	女性	52	ユニットケア	21
H	男性	30	従来型のケア	8

表2 調査対象者(高齢者)のプロフィール

	性別	年齢	入居年数(年)	年齢	要介護度
A	女性	51	2	85	自立
B	女性	36	5	88	要支援1
C	女性	29	10	93	要支援2
D	女性	38	4	87	要支援2
E	女性	25	6	87	要介護1

(2) 質的調査の結果をもとに調査票を作成し、大阪府の高齢者施設・介護保険事業所等の介護職員を対象に、高齢者の小さな自己決定の支援に関する意識調査を横断的郵送法により実施する。A地域の高齢者施設・介護保険事業所等 170 ヶ所を無作為に抽出し、1 ヶ所につき3名の介護福祉士を調査対象とした。2013年5月の1ヶ月間、横断的郵送法を実施した。有効回収率は35.3%(180)であった。

(3) 承諾を得た研究メンバーが働く施設・事業所において、高齢者の自己決定を支援する要因の検証作業を実施し、自己決定に至るプロセスのフローチャートを作成した。

(4) 執筆は研究メンバーで担当して、報告書を作成した。

4. 倫理的配慮

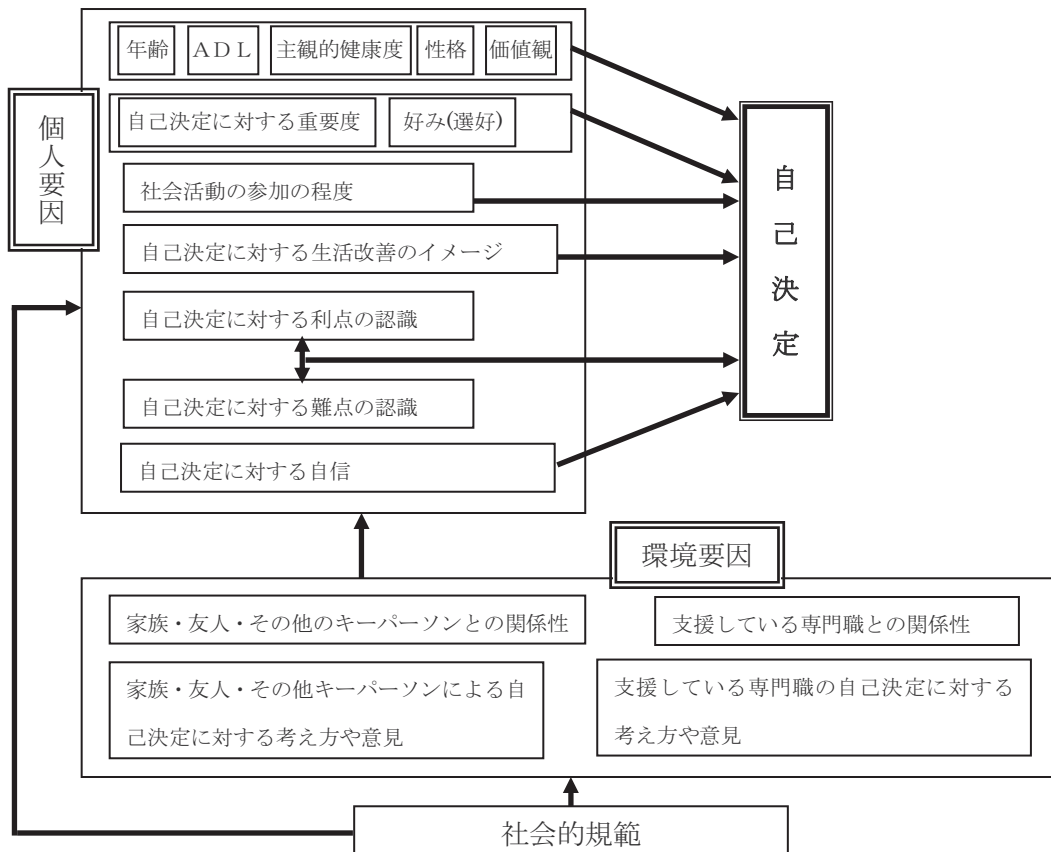
質的調査依頼にあたっては、施設長に文書をもって調査の趣旨を説明し了解を得た上で、当該施設で勤務している介護福祉士を調査対象者として紹介してもらった。その後、紹介してもらった介護福祉士に調査の趣旨を説明し、理解していただけたら協力してほしいこと、協力を断ってもよいこと、協力が得られた場合は、データは事業所及び個人のプライバシーの保護に十分配慮し、匿名性が確保されること、面接に際しては、語りたくないことは語らなくてもよいことなどを確認し、録音することの確認のうえ実施した。また、ケアハウス入居者である高齢者に対しても、施設長に文書をもって調査の趣旨を説明し了解を得た上で、インタビュー対象者に同様の手続きを実施した。

量的調査にあたっては、高齢者施設・介護保険事業所宛ての依頼文書において、データは統計的に処理され、匿名性が確保されることを明記した。

4. 結果

質的調査結果

図1 高齢者の自己決定のプロセス



量的調査結果

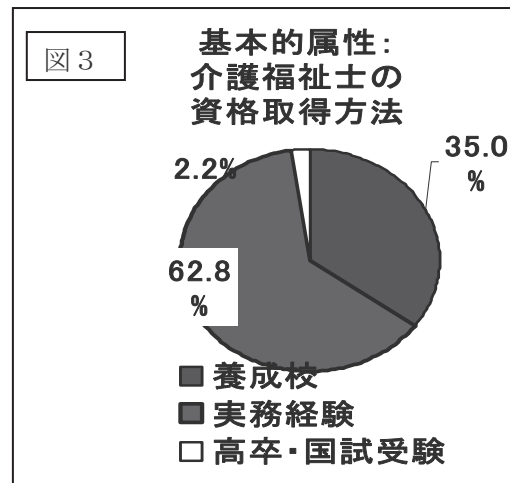
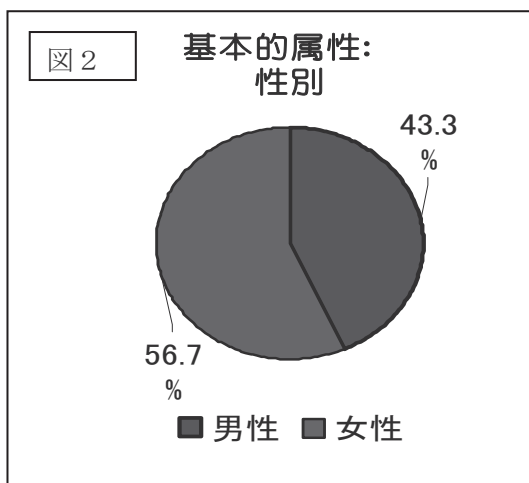


図4 利用者の自己決定を促すためには、2～3の選択肢を用意して、その中から選んでいただく、閉ざされた質問が適切であると思いますか？

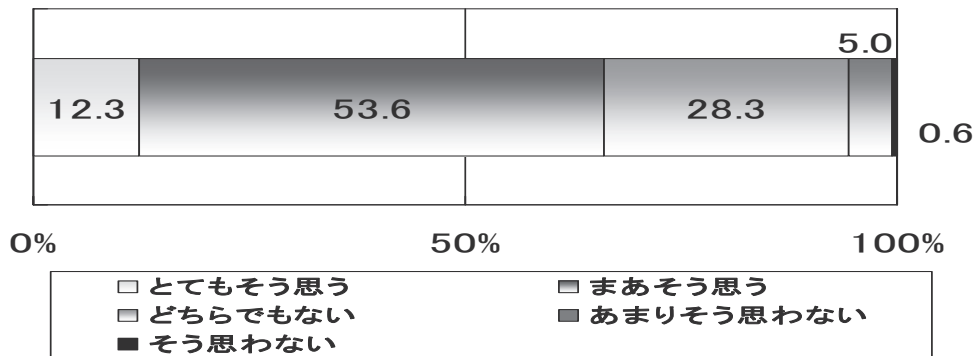


表3 T検定結果 「閉ざされた質問が適切」と「とてもそう思う群」と「まあそう思う群」の比較

	とても そう思う群		t値	まあ そう思う群	
	平均値	標準偏差		平均値	標準偏差
利用者が 自分ですのを待つ	2.59	.73	-2.30 *	2.39	.53
利用者の 自己決定能力の把握	3.81	.40	-1.12	3.59	.64
利用者の 認知レベルの見極め	3.14	.71	-0.35	3.07	.78
利用者の ADLの見極め	2.86	.64	-2.90 *	2.47	.56

「要介護高齢者に対して、閉ざされた質問が適切である」という質問項目について「とてもそう思う」と回答した人は12.3%で、「まあそう思う」と回答した人は53.6%であった。「とてもそう思う」と「まあそう思う」と回答した人の合算は65.9%であった。一方、開かれた質問が適切と回答した人は0%であった。さらに、閉ざされた質問が適切と回答した人たちの「とてもそう思う群」と「まあそう思う群」、2つのグループ間における自己決定に関する実践の程度（「利用者が自分ですのを待つ」、「利用者の自己決定能力の把握」、「利用者の認知レベルの見極め」、「利用者のADLの見極め」）についてt検定の結果、「利用者が自分ですのを待つ」と「利用者のADLの見極め」について有意な差が見られた。

5. 考察と今後の課題

要介護高齢者の自己決定を促すためには、「どうされますか？」といった開かれた質問よりも、2～3の選択肢を用意して、その中から選んでもらったり、「イエスカノー」で答えてもらう閉ざされた質問の方が適切であると認識している介護福祉士が多いことが明らかになった。このような結果は、日常生活における衣服の選択や飲み物の選択等といった小さ

な自己決定であっても、記憶障害や見当識障害のある利用者にとっては、ストックされた知識を引き出して、総合的に判断し、結論を導き出すことが困難であることから推測できる。また、「利用者が自分ですのを待つ」と「利用者のADLの見極め」において有意な差が見られた。このような結果は、日常業務の中で、閉ざされた質問を活用して、要介護高齢者の自己決定を促している介護福祉士ほど、利用者が自分ですのを待つことや利用者のADLを見積もっていた。一方、「利用者の自己決定能力の把握」、「利用者の認知レベルの見極め」において有意な差が見られなかった。「利用者の自己決定能力の把握」、「利用者の認知レベルの見極め」といった実践は、閉ざされた質問に関する意識の差だけでは、影響を受けにくいようだ。他の要素も検討することが求められる。また、介護福祉士にとっては、様々なスケール等を活用して判断する利用者の知的な能力よりも、視覚的に判断しやすい身体的な能力を見積もる方が容易であることが推測される。最後に、要介護高齢者が自己決定できるかどうかは、どのように質問されたかで異なることが明らかになった。このような結果から、具体的支援方法として、例えば、レクリエーション時に塗絵をする場合、色鉛筆を見てもらいながら、どの色にするのか選択してもらおう等の支援が考えられる。そのためには、利用者のアセスメントが重要であると考えられる。また、日本人の自己決定では、個人の強調よりも他者との関係の中での自己決定が展開されているようだ。今後は、関係性の中の自己決定についても検討することが求められる。

6. 文献

- ①立岩 真也、弱くある自由へ：自己決定・介護・生死の技術、青土社、2007.
- ②佐藤百合子、高齢者のQOLと自己決定権、季刊社会保障研究、31 巻 1 号、p90～99、1995.

7. 経費使徒明細

大同生命地域福祉研究助成金収支決算書	
区	分
収入総額	300,000
研究助成金	300,000
支出総額	305,590
通信費(切手代)	68,130
事務用品費(用紙・ファイル等)	12,592
交通費(タクシー代・電車賃)	22,200
人件費(アルバイト代)	66,400
日本介護福祉学会第21回全国大会参加費	60,000
コピー代	16,420
会場費(集会時の会場代)6回分	36,000
資料代(参考文献購入費)	16,567
雑費(インタビュー訪問時手土産代等)	3,606
会議費(アルバイトお茶代)	3,675
収支差額	-5,590

- ・アルバイト代
@800×83 時間
- ・交通費(施設訪問)
- ・学術研究会参加費
@12,000×5 名分